

第3章 研究の方法

3-1 研究対象の選定

墨田区の「小さな博物館」を対象に選ぶ。1993年に近藤が行った研究『ミニ博物館事業における「館長」意識の形成過程に関する研究』¹⁾で対象とした墨田区「小さな博物館」と伊勢市「まちかど博物館」の調査の際に得たヒアリングデータがあり、このデータとの比較を行えば、個々の博物館の13年間の変化を読み取ることができる。また、行政主導型の墨田区の場合は、年間報告書や館長会議の議事録等のデータが保存されているが、市民グループ主導型の伊勢の場合は、調査以降のデータは保存しておらず入手できないため、墨田区のみを対象とする。

3-2 研究対象の概要

3-2-1 墨田区の概要²⁾

墨田区は、東京都23区の東に位置する、人口233,023人、面積13.75 km²の中小零細企業を中心とした住・工混在型都市である。区内の総事業所数の29.2%、総従業員数の25.8%を製造業が占めている。製造業の割合が高く、下請けの性格が強いことが産業構造の特徴である。墨田区の製造業は、ニット、袋物、アクセサリなどファッション関連産業、プレス、めっき、金型を中心とする機械金属産業、印刷などの情報関連工業の3つであり、日用品雑貨が中心である。押し絵羽子板などの伝統工芸もこの中に含まれる。

墨田区のこのような産業構造のルーツは、江戸時代にさかのぼる。当時、江戸の交通を支えた隅田川周辺は、江戸が繁栄するにつれて、川辺に集中していた商工業が飽和状態になり、現在の墨田区内に進出したことによって発展した。

その頃の面影を色濃く残しているのが、現在の墨田区の特徴である。日用雑貨を中心とした軽工業の比率が高いこと、家内工業型の中小企業が多いこと、伝統工芸が脈々と受け継がれていることなど、江戸時代の産業構造がそのまま現在まで残されている。

産業革命を起こした明治維新により一時は近代工業都市になったが、関東大震災と東京大空襲という二つの大きな打撃により、大きな工場は臨海部へ移転し、再び軽工業中心の産業構造に戻った。そして、昭和30年代の高度経済成長の中で、墨田区の産業は大きく成長を遂げた。しかし、昭和39年の東京オリンピックを境に東京は様変わり始めた。「公害問題」や「工場再配置」に影響を受け、区内からさらに工場が他地域へ流出し、第3次産業への就業人口の偏りにより、労働力の製造業離れが深刻化した。このような時代変遷を経て、中小零細企業の活性化など区民の生活を守るために早急な産業振興策を講じる必要性が切実なものとなっていった。

そこで、提案されたのが本研究で対象とする「小さな博物館」を含む3M運動である。

3-2-2 3M運動の概要

区内産業のイメージアップ、PR 運動のひとつで、区の産業や文化に関するコレクションを事業所や民家等で公開する「小さな博物館」(Museum)、工房と店舗の機能を備えた、製造と販売が一体化した「工房ショップ」(Manufacturing shop)、付加価値の高い製品を創る技術者である「マイスター」(Meister) の 3 本を柱として地域の活性化を図るものである。3つの頭文字をとって「3M (スリーエム) 運動」という。

3-2-3 「小さな博物館」の概要

(1) 「小さな博物館」一覧

「小さな博物館」という名称ではあるが、規模の大きなものから小さなものまで様々な博物館が存在する。共通することは、墨田区独自の産業や文化に関係するものであるということである。江戸時代から続く“職人の町”であるため、博物館の館長には、伝統工芸の職人や、大工職人が多い。また、個人の収集物を展示し、一般来館者に公開するコレクターもいる。まさに、区民が自分の得意分野を活かしながら自分のフィールドにただで参加することができるまちづくりである。



図 3-1 「小さな博物館」の地図

【スローガン】¹⁾

墨田は「産業」のまち。

しかしまだまだ知られていない産業製品や資料、文献などがたくさんあります。これらを収集している方々や企業に、そのコレクションを公開していただき、墨田の「産業」と「文化」を区内外に広くPRしようというのが「小さな博物館」運動です。

エリア A

軟式野球資料室・鈴木木工博物館
木造建築資料館・セイコー時計資料館

エリア B

小林人形資料館・古伊万里資料館
江戸小紋博物館

エリア C

羽子板資料館・合金鋳物博物館
藍染博物館・江戸木目込人形博物館

エリア D

屏風博物館

エリア E

能面博物館

エリア F

乾燥木材工芸資料館
ブレーキ博物館

エリア G

べっ甲資料館・木彫資料館
新藤ギャラリー
NTT ドコモ歴史展示スクエア

エリア H

相撲写真資料館・足袋資料館
桐の博物館・金庫と鍵の博物館
建築道具木組資料館
プジョーモトサイクル歴史博物館
折箱博物館・袋物博物館

(2) 「小さな博物館」の位置づけ

1985 年に、プランナー（井上優氏：当時の 3M 運動企画委員会座長）による提案によって 3M 運動が展開されることになった。下記は、3M 運動および小さな博物館の呼びかけ文である。墨田区の切実な問題意識と明確な目的が明記されている。

墨田区が、繁栄するためには、墨田区の産業が繁栄しなくてはなりません。
墨田区の産業が、繁栄するためには、墨田区の産物が高く評価されなくてはなりません。

しかし、今日の、墨田区の産業と産物は「正当な評価」をうけているでしょうか。時には正当な評価よりも、はるかに低い評価をうけることさえ少なくありません。このことが、墨田区の産業の成長を妨げ、墨田区の都市づくりを妨げる原因のひとつになっているともいえます。

墨田区は、墨田区の産業と産物が、「正当な評価」を受け、「さらに高い評価」をうけるための、対策を実施したいと考えます。

そして、その対応として、「3M キャンペーン」を展開したいと考えます。」
これを区民の運動に育てたいと考えます。そして、その第一次の展開として「小さな博物館」の運動を行いたいと思います。

（出典：「文化のまちづくり」提案²⁾ より）

小さな博物館の位置付けは、墨田区のイメージアップ施策の第一段階として、まず、多くの人に「すみだ」を知ってもらい、足を運んでもらうことを目的とした、産業振興策である。なお、墨田区は、イメージ戦略の一環として「墨田」ではなく「すみだ」という表記を使う。

3-3 調査方法

小さな博物館における「館長」・「来館者」・「行政担当者」・「ガイド」の関係は図 3-2 のようになっている。今回の調査では、「館長」と「行政担当者」に対してヒアリングを行った。

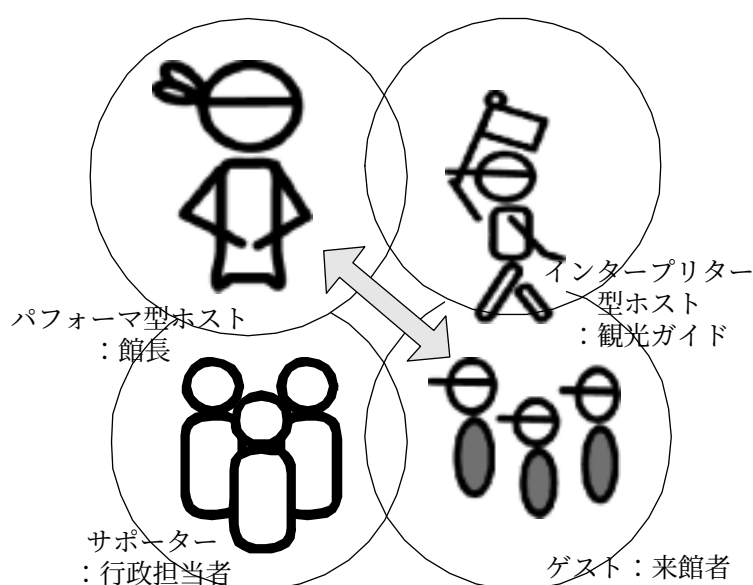


図 3-2 「小さな博物館」におけるホスト・ゲスト・サポーターの関係図

(1) ヒアリング対象

① 墨田区役所産業経済課 商工担当 秋元晃一氏

主催者として、「小さな博物館」のこれまでの全体的な経緯と、現在のサポートや広報活動など運営面についてヒアリングを行った。

② 博物館の館長（1986 年～1993 年に開館し、現在まで継続中の 14 館）

今回の調査では、先行研究の調査データと比較をするため、その調査時から現在まで、継続的な運営を行っている 14 館をヒアリングの対象にしぼった。

ヒアリングの項目は以下の通りである。各博物館のこれまでの経緯と現状、将来についてヒアリングを行った。

- ・ 博物館の運営上の変更点（館長交代、改修など）
- ・ 来館者との交流について（印象に残った来館者、交流形態など）
- ・ 生活や仕事への影響（トクしたこと、ソンしたことなど）
- ・ 墨田区のサポートについて（サポート内容、サポートに対する不満評価など）
- ・ 今後の運営について（継続意志、次世代に関する考え）

- ・ 館長の持つネットワーク（行政・同業者・仲間など）

③ 新規の博物館の館長（屏風博物館の片岡恭一氏）

「小さな博物館」の時代変遷、現状を把握するために、1993 年以降に開館した新規の博物館にもヒアリングを行った。

（２）ヒアリング調査の実際

表 3-2 の日程でヒアリングを実施した。区役所、及び各館にヒアリングのアポイントメントを取り、区役所、及び各博物館にて、一館につき約 1 時間～2 時間のヒアリングを行った。なお、館長間においてコメントに差がなるべく生じないように、質問票を作った上で著者が質問をし、対象者に答えてもらうという形式をとった。

表 3-1 ヒアリング調査の日程

訪問日	時間帯	博物館名	対応者	調査
2005/10/14	09:10～10:20	羽子板資料館	西山幸一郎氏	
	13:30～14:30	乾燥木材工芸資料館	鈴木康之氏	
	15:30～18:00	墨田区役所産業経済課	秋元晃一氏	
2005/10/15	09:45～12:00	建築道具・木組資料館	森下良治氏	
	13:20～14:10	木造建築資料館	山崎孝行氏	
	15:30～18:30	古伊万里資料館	應後大吾氏	
2005/10/16	13:20～16:00	合金鑄物博物館	茂呂 初氏	
2005/10/17	10:00～11:30	足袋資料館	宮下梅治氏	
	13:00～14:30	軟式野球資料館	芳川真章氏	
	15:30～17:00	能面博物館	金子利七氏	
2005/10/18	10:00～12:00	相撲写真資料館	工藤 明氏	
2005/11/14	15:30～18:00	屏風博物館	片岡恭一氏	

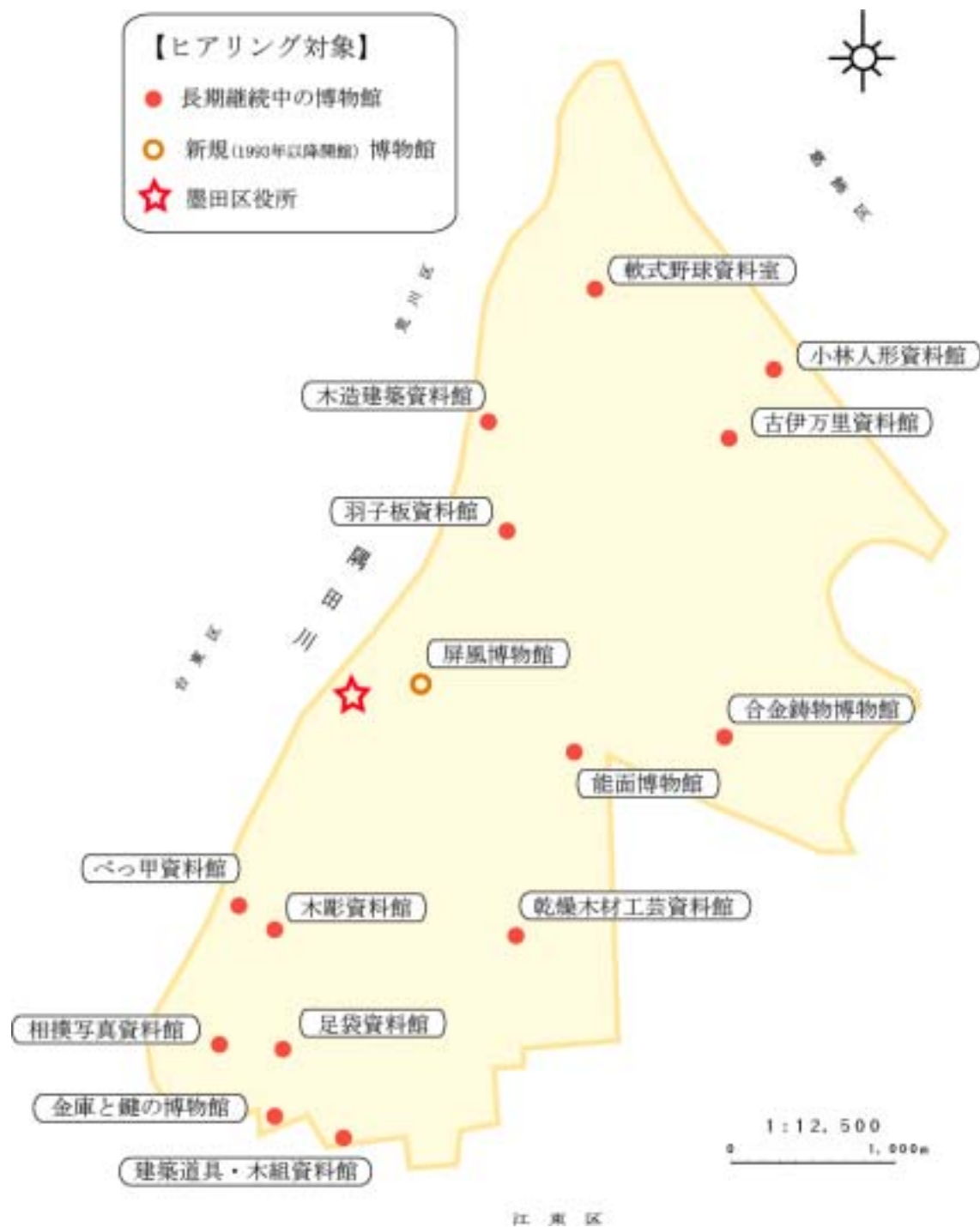
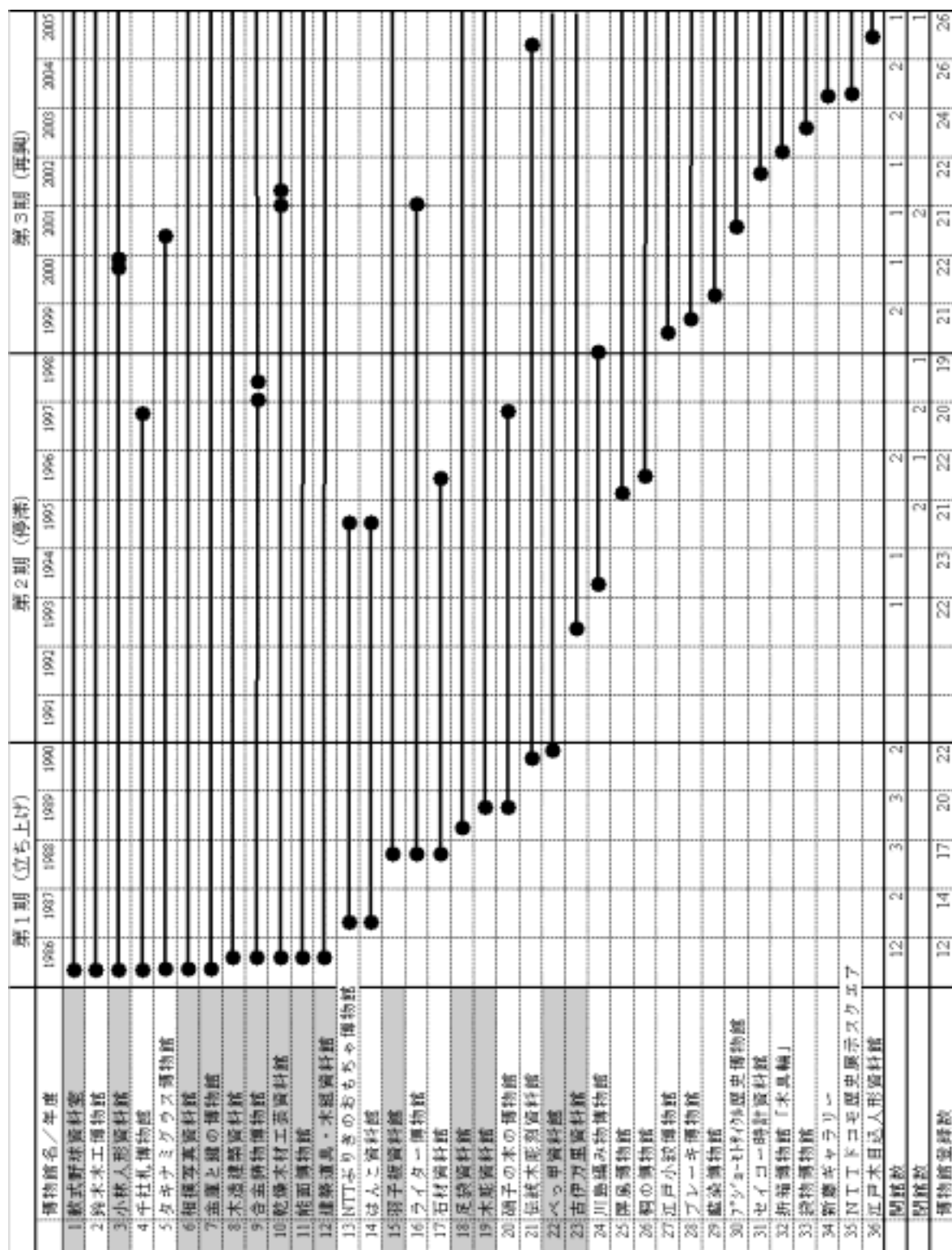


図 3-3 ヒアリング対象の分布図

表 3-2 「小さな博物館」開設時期一覧



博物館名……ヒアリング の調査対象。

(出典:「小さな博物館」開館・廃館時期一覧)

3-4 分析方法

3-4-1 分析の流れ

分析の流れを図3-に示す。

まず、93年・05年の資料、区の担当者・新規博物館の館長へのヒアリングの結果より、「小さな博物館」が開設した1986年から2005年までの時代背景をまとめる。

次に、93年から05年における各博物館の経過から、「館長継続型」・「館長交代型」・「閉館型」に分類し、項目ごとに経過をまとめる。

「小さな博物館」の継続性における課題として、館長意識の継続と、世代交代があげられる。館長意識の継続性に関する分析を、役割形態類型を用いて行い、世代交代に関する分析を博物館の構成要素類型を用いて行う。

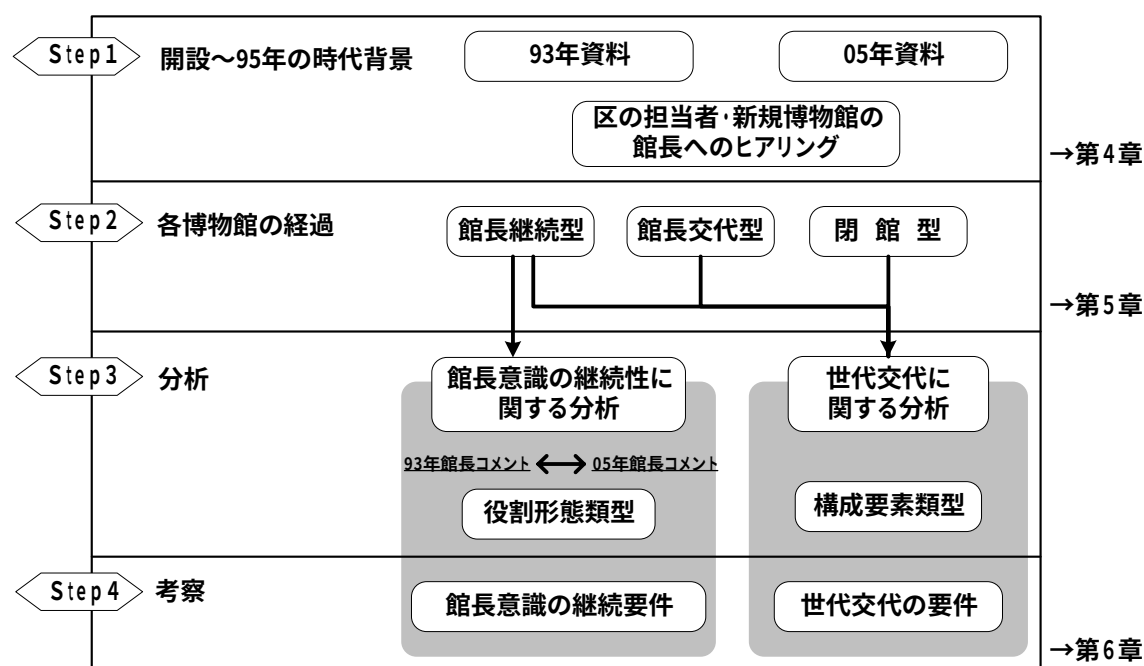


図3-4 分析の流れ

3-4-2 博物館の役割形態類型について

先行研究⁴⁾の中で博物館を「各博物館が持つ機能」別に類型化してコメントの関連分析を行った。「各博物館が持つ機能」とは、「収集履歴伝達」・「歴史文化伝達」・「技術見学体験」・「現状作品観察」・「作品展示販売」の5つである。

収集履歴伝達

収集したものの履歴や内容について伝える

歴史文化伝達

技術や地域の歴史や文化を伝える

技術見学体験

実際の技術（技・芸）を見学したり体験する

現状作品観察

完成した作品、ものを見ることができる

作品展示販売

作品を展示すると同時に販売もしている

上記の機能の有無によるクラスター分析を行い、以下のような類型化を行った。

わざ単独型

技術見学体験・現状作品観察・作品展示販売の機能を持ち、その多くは、仕事場をそのまま開放するか、少し展示場を設ける程度の対応であり、「見たければ見れば良い」という姿勢がある。

わざ関連型

わざ単独型に歴史文化伝達機能を付加したものであり、開館し際して関連するモノを展示、収集するなど積極的に対応している。

展示中心型

技術やわざを実際に見学することはできないが、関連する歴史・文化や作品を見ることができる。ショールーム的な博物館である。

展示販売型

見るだけでなく、関連するものを購買可能である。ただし、それほど商売と関連づけられていないために、売上などは期待されない。

関連収集型

仕事と関連するモノを収集し、展示する。仕事に対する直接的な効果はないが、間接的には仕事への理解を促す効果がある。

趣味収集型

収集履歴伝達機能だけを持ち、コレクションを見せる場所である。仕事に関係ないモノが多く、いわゆるマニア的な陳列物が並ぶ。

第3章 脚注及び引用、参考文献

1) すみだ中小企業センター：データ検索

<<http://www.techno-city.sumida.tokyo.jp/shisetsu/index.html>>2006-1-27

2) 墨田区商工部産業経済課:新しいすみだ3Mキャンペーンの歩み(1994)

3) 文化庁委託：「文化のまちづくり」の提案,p195, 社団法人日本建築学会(1995)

4) 近藤隆二郎,盛岡通:ミニ博物館事業における「館長」意識の形成過程に関する研究-墨田区「小さな博物館」と伊勢市「まちかど博物館」-,日本都市計画学会学術研究論文集,703-708 (1994)